

ずいそう

プロの苦しみとアマの楽しみ —技術開発現場における規制と進化—



富田 茂

2014年4月27日中日新聞報道によると、名古屋市で無線操縦による無人飛行撮影機が深夜の繁華街で落下した。この事件から、技術開発と法的規制の在り方について考察をする。

当然、こうした無謀な事件の多くはアマチュアが引き起こす。概して、プロフェッショナルは事故を起こすが、無謀な事件は起こさないものである。

趣味で無人飛行機を飛ばすことはとても楽しく、スリルですら楽しむことができる。初めてのフライトなどは、ドキドキしながら、誰かに見てもらいたい、と思うものであろう。そして、うまく飛ばなかった場合でも、仲間と笑いながら勇気あるフライト談話は弾むのである。趣味は、そうしたストレス発散ができるからよい。

同じ行為でも、業務で行うとなれば、決して楽しむことはできない。例えば、無人飛行機の組み立て段階でも、プロは手順どおりに行き、一切の造作や工夫も上司からの許可が下りない限り施すことは無い。うまくいくという確証を得なければ、決して実証に移ることはない。うまく飛ばすということではなく、仕事仲間とのギリギリ張りつめた現場での一日が続くのである。

スポーツの世界も、プロとアマの精神的な違いがあると思う。アマチュアスポーツの最高峰の一つとして、オリンピック競技がある。同じルールの中で極限まで高めた肉体を使い、一瞬のチャンスをもたして勝敗が付いた後、選手同士が互いにその健闘をたたえ合う姿は、観ているものを感動させる。敗者にも惜しめない拍手が湧くのである。勝ち負けではなく、参加することに意義があるのであろうか。プロスポーツ選手は、参加することに意義があるのではなく、ファンなど観ている者を楽しませることと、選手自身が確実に成果を残し続けることに意義がある。つまり、一瞬のチャンスではなく、データを分析しチャンスを狙って勝負が付く。

プロとアマが混在するゴルフ競技などでは、アマチュアがプロに勝ってしまうことがある。ゴルフのように道具を使うスポーツは、プロと同じ道具をメーカーから支給されているようである。使っている道具が同じで、使いこなす能力があり、普段の最高結果ばかりが出現すれば、プロに匹敵してしまうのである。これをミラクルというのであろうか。

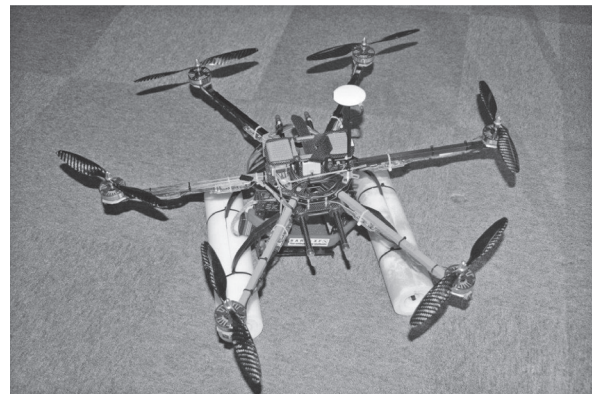
ではプロがミラクルを期待するのであろうか？ 我々が普段仕事をしている中で、ミラクルを期待して行っているとすれば、お客様はたまったものではないだろう。プロは当然、夢の実現と自信はもっていないからではない。自信は普段の練習から積み上げられる。

アマチュアは、自信以上に過信を持っているのかもしれない。夢とミラクル（奇跡）を混同して、訓練以上の奇跡が自分に舞い降りてくることを期待しているのかもしれない。つまり、ミラクルを期待する者は、アマチュアレベルということになる。

弊社は無人飛行探査機(写真—1参照)の開発を行っている。常に細心の注意と、最新の技術を駆使して、災害時探査飛行や地下探査飛行、中継放送用飛行撮影を行っている。冒頭のアマチュアは、新聞報道から推察するに、我々プロと同じレベルの道具を使っていたようだ。しかし、道具である以上、常にメンテナンスと運行前確認をしなければ、道具の性能は出ない。使いこなせるだけの技量があるのかはわからないが、きっと過信していたのだろう。

そしてこのような事件があると、世論は新規規制や法律による取り締まり、はたまたは開発についても「危険技術」と誤認してしまう。そうなれば、技術開発は停滞し、産業革命など起きない。某車のブレーキ問題についても、決着については多くの課題があると思うが、もしブレーキ制御プログラムの数秒足らずのレスポンス遅延が重大な問題と決着し、危険技術として葬られたらどうなるであろう。馬車に乗って「馬の制御」の時代に戻るのであろうか？

プロの技術開発は、多くの臆病な技術者のトライとエラーで構築されている。プロはプロとして、その最高見識とプライドも持って苦しみながら、最新技術にチャレンジしなければならない。しかし、自らの技術を過信はしてはならない。アマチュアの技術利用は、多くの勇気とミラクル到来を下にしたチャレンジで構築された、娯楽である。混同してはいけない。



写真—1 災害現場探査機 (キャリオ技研製)

—とみた しげる キャリオ技研(株) 代表取締役—